

明治維新の論理と構想（二・完）

——木戸孝允を中心に——

五十嵐 暁 郎

三

「大條理」に表明された天皇制中央集権国家建設の目標を達成するために、木戸、大久保ら倒幕派のとった戦略は、幕府側の敵対的行動はもちろんのこと、土佐藩が提起した大政奉還、列藩會議政体論という妥協的なコースをも排除して、政治状況をひたすら武力的対決へ持ち込もうとすることであった。鳥羽・伏見の号砲は、そのまま彼らの意志表明であった。「元来、終天之共に讎と相成居候姿に付、幕にも我を滅し不申而は、不得其志之訳に付、就而は雙方いづれ欺相斃れ候までは、真之静謐も六つヶ敷事歟と被存申候」⁽¹⁾「十段目ハ砲撃芝居ヨリ致方ナシ」⁽²⁾というように、対立が敵の存在そのものの否定にまで行きつかざるをえない以上、倒幕のため終局的には武力を行使しなければならぬと彼らは考えていた。「皇国内之大乱ニ及候トモ」⁽³⁾、「條理ヲ失」⁽⁴⁾うべからずという彼らの決意は固かった。

だが同時に木戸は、戊辰戦争の内乱は必然であるのみならず、革命遂行のために必要でもあると考えていた。つまり、この機会に、国内に沸騰するエネルギーを利用して、可能なかぎり旧体制を破壊し、新国家建設の地ならしを行

おうというのが木戸のねらいであった。徳川三百年の支配を廃止し、トータルな変革——「御一新」を実現するためには、「戦争より良法は無⁽⁵⁾」という考えである。もちろん、木戸も、内戦が長期化することによって生じるリスクが大きいことは承知していた。「天下大疲弊は眼前に迫り⁽⁶⁾」「外夷之術中に陥り候儀は眼前之事⁽⁷⁾」というように内外からの「大瓦解⁽⁸⁾」の危機感はずねに彼を脅しつつづけていた。それにもかかわらず、「目前之安きを求め候得は、自ら皮表之療治に馳せ、筋骨より復するの手段に候得は、頑毒を發表してかり尽し候之両手段外有之間敷歟⁽⁹⁾」と木戸は言い切る。ここには革命遂行への木戸のラディカルな姿勢がみられる。

このように急進主義的な政治指導へと木戸をつき動かしていた動機の一つは、幕末の政争や戦闘で落命した同志にたいする責任感であった。維新後の木戸の日記や書翰からは、随所に、彼らの死や彼らの「誠心」についての思いと、それが変革の曲折をさまよいつづけている自分への自責の念となっていることがうかがわれる。真木ら尊攘派の志士たちはもとより、長州藩内においても久坂や高杉はじめ多くの同志が、自らの生命を賭けて希求した変革が達成される日を見とどけることなく、悲壮かつ無念の最後を遂げていった。そのような彼らの死にたいする思いが、生き残った身をさいなみ、その変革を完成させなければならぬという責任感となって、木戸の行動を内部からつき動かしていた。かつて高杉が同志の死に際して「後れても後れても又君たちに誓いし言を吾忘れめや⁽¹⁰⁾」と詠んだ心情が、維新後の木戸の政治的使命感を形づくっていたといえよう⁽¹¹⁾。その使命感は、中央集権国家の形成という革命の目標へむけて木戸をいっそう駆りたてずにはおかなかったし、また「真之大政一新」を遂行し、「皇国を維持し億兆を保護する⁽¹²⁾」という理想を掲げるのに躊躇させなかった。そしてその理想のもとに、また前述のように中央政府官僚としての自覚ゆえに、木戸は政治家としての責任倫理や公平な立場をとるべきことをつねに強調したのである。

だが、戊辰戦争の勝利が確定的となったにもかかわらず、木戸にとって、彼のめざす「大政一新」は次第に手の中

からこぼれ落ちつつあるようにさえ思われた。「債将来之大勢を推考仕候處、今日之人情に而相移り候時は、大政一新之御旨趣も乍恐いかゝ相成可申歟。元来、御一新之御一新たる所以は、皇国を御維持被為遊候而こそ、始而其御名実相叶候譯に御座候處、哀哉可浩歎は、宇内之大勢に對し候時は、皇国之急昨日より今日に迫り候處、唯目前之一平定に而上下とも其理通徹仕兼、多くは今日に大安堵仕候而、前途大興起之目的更に相窺はれ不申。尤春來徳川氏之頭面を擊挫き候は、大政一新におゐて不得止之一條理にて、是而已に而大政一新は相濟候ものと相心得候而は、天下億萬蒼生之大罪人に政府は相成申候。前途之目的相窺はれずと申候も、天下之諸侯も自分々は兎も角も、其藩々々に於ては功名之念勃々に而、諸藩挙而賞論之事而已之外は議論も無之、其上舊幕之時よりも自然と驕氣は相募り、藩力を以我儘等相應に朝廷へ申立、名義と歟名分と歟喋々申候も、多くは馨而已に成行、宇内之大勢を察し皇国をして萬世維持仕候なと申邊之所作ぶりは毫も相見不申、唯々己に利を引候様之風習に相移り、却而人の非は探り、人之能は妬み、人の惡は怒り、元來日本人規模狭少と申處も可有之候得共、全其而已にも無之、大道之衰たる處も可相之、第一大政官に於ては肝要なる會計之目的も今に相立不申、是亦今日之姿に而は、日本も大政官も會計に而つぶされ候様相成可申」⁽¹³⁾

新政府に集った人々は倒幕をもって「大政一新は相濟候もの」と「大安堵」⁽¹⁴⁾し、諸藩は「功名之念勃々」として「驕氣」をつのらせ、たがいに利益を争う有様である。対外的独立を維持するために将来の方針（「根軸」）⁽¹⁵⁾を真剣に考えようとする者は少ない。新政府は確固たる方針を欠いてたえず動揺し、その土台は早くも亀裂を生じつつあった。加うるに、この年はじめから、浮浪徒の横行、賈金鑄造事件、キリスト教徒処分問題、農民一揆と、新政府は内政・外交にまたがる重大な危機に直面していた。「内は沸騰仕、外国は迫り」⁽¹⁶⁾、「百事瓦解」⁽¹⁷⁾の危機感⁽¹⁸⁾は新政府指導者を圧迫しつづけていた。

一八六八年（明治元）から翌年にかけて木戸が提唱した征韓論は、このような危機を乗り切り、国内政治勢力を強力かつ急速に結集して、近代国家建設へ再び舵を取りなおすために彼がとった手段であった。誕生間もない新政府にとってきわめて大胆なこの計画は、明らかに幕末長州藩の割拠の際に発見した、対外危機は集団内部の対立を和らげ結束を強化するという政治の一般法則からヒントを得ていると思われる。つまり「癸丑已来」の外圧の危機感が人々の政治意識の基調となつていることに着目し、今度は意図的に対外的緊張を作り出し、それへの人々の反応を利用して国内の結束と政府への協力を引き出し、この難事業を遂行しようとしたのである。

ところで、このような意図をもつ侵略行為を、木戸は次のように「合理化」している。「征といへとも猥りに之を征するにあらず。宇内の條理を欲推する也。其條理を欲推ものは、則我國是を以てする所也。」⁽¹⁹⁾ここで「宇内の條理」「国是」と言われているのは、国際社会への参加であり開国政策である。つまり国際社会への参加が世界の大勢であり、朝鮮もこれに応じて開国すべきだというのが、ここでの木戸の論理である。

それでは木戸は、「宇内の條理」が、それに服従すべき普遍的価値あるいは服従するに足る秩序、規範によって裏打ちされ保障されていると考えていたのであろうか。木戸の国際社会観は、当時国際社会を律する唯一の規範と一般に考えられていた万国公法についての認識に端的にあらわれている。「兵力不調ときは萬国公法も元より不可信」⁽²⁰⁾彼は述べている。「萬国公法など、申候而も、是又人之国を奪ひ候之道具に而、毫も油断不相成、今日世間縦横往来相開け居候に付、名目無之而は猥りに人之国も不被奪故、不得止如此之法を立候もの歟と愚考仕候。弱国は比法を以奪ひ、強国比法に而未奪れ候を不聞、安心不相成世界に御座候。」⁽²¹⁾万国公法も名ばかり、というよりもそれを名目にしてアジア諸国を植民地化しようという、あくことなき欲望をもった西欧列強のパワーポリティクスが横行するのが国際社会の現実である。そこには諸国家が服従する規範は、いかなる意味においても存在しない。このような木戸の国際社会

観によれば、「宇内の條理」の現実、西列強による植民地化の思惑を秘めたエゴイスティックな開国の要求にはかならない。そしてまた、「宇内の條理を欲推する」とは、西列強のそのような態度にならった行動を朝鮮に向けてとることにほかならないであろう。「東海に光輝を生し候はここに始り候事と愚考仕候。」⁽²²⁾という言葉には、対外的独立維持という立場をこえて、将来アジアにたいする優越的な地位を獲得したいとする木戸の願望が投影されている。少なくとも、ここには「大條理」を掲げたときに見せたような、普遍的理念を志向する姿勢は見られない。「條理」は現状追隨的な現実主義に陥っているのである。「安心不相成世界」という、「癸丑」の恐怖感をそのままひきずった、国際社会の動向にたいする木戸の強い警戒の念は、終生変ることなく彼の政治思想を規定し続けたのであり、それゆえにそこからは、冷たい打算にみちた、その意味ではリアルな外交策が打出されていくのである。

木戸の判断によれば、朝鮮を相手に武力を行使したところで、「元より物産金銀之利益は有之間敷、却而御損失とは奉存候得共、皇国之大方向を相立、億萬生之眼を内外に一変仕、海陸之諸技芸等をして実着に走らしめ」⁽²³⁾るには、これ以上よい方法は見当らない。我国は軍事的にみて圧倒的に優勢であり、右の目的にそって「進止自在之宣」⁽²⁴⁾を得ることが可能である。つまり自国の近代化のために隣国を侵略し、十分に利用しつくすことができるというのが、木戸の目算であった。⁽²⁵⁾

だが、新政府および政治状況の不安定の根はより深い所にあり、解決もまた抜本的なものでなければならなかった。作爲的な対外的緊張による危機の打開は、所詮一時しのぎにすぎなかったといえよう。一八六九年（明治二）の危機をかりうじて乗り切ったのちは、木戸は再び征韓論を唱えることはなく、むしろ一貫して、ナショナリストイックな感情の昂揚にひきずられ、大きな負担やリスクのともなう対外侵略に反対しつづけた。⁽²⁶⁾

そもそも新政府は、この段階では、幕藩体制の構造そのものには決定的な変更を加えることなく、いわば幕府とそ

の権力の座を交代したにすぎなかった。むしろ、固有の軍事力を保有しないという点では、幕府とは比較にならぬほど、新政府の権力基盤は脆弱であった。そのために、新政府は薩長はじめ雄藩、ことにその軍隊に依存せざるをえなかった。その結果、「朝廷は自ら薩長に傾き、薩長は又其兵隊に傾き、諸藩亦概如此類。真に尾大之弊を不能免して、真権之所帰着、決而末可認⁽²⁷⁾」薩長の軍事力に依存せざるをえない「半身大不随⁽²⁸⁾」の新政府は、それゆえにまた、つねに薩長、ことにその軍隊の意向によって振りまわされる「尾大之弊」をまぬがれなかったのである。

ところが、このような窮状にたいし、伝統的な宮廷政治を脱しきれない公卿、「腐儒迂生」は「固陋の見を以、天下の大機を誤らん」とし、「鳥合の朝廷⁽²⁹⁾」はまた「始終他顧之念而已⁽³⁰⁾」で「朝に右折し夕に左曲するの弊⁽³¹⁾」をまぬがれず、その逡巡のありさまは、およそ主権者たるに似つかわしからぬ実態に木戸の目には映じた。政府が「百折不撓」の覚悟をもって、「大根軸」をうち立てることこそが「百事瓦解」の危機をのり切るために必要だった。また、このような不決断は、木戸によれば、維新国家の基礎を直接つき崩すことにほかならなかった。なぜならば、維新までの封建体制にあつては、武家が権力を掌握していたかわりに、「天下の恨み帰する所ありて、而して天子は徳を全す」ることができた。しかし「今や則ち然らず。聖慈親臨萬姓懿澤を仰く。若し一旦弊を受る者あらは、天下の恨み其れ誰に帰せんや。今の臣子たるもの、思慮誠に此に及は。豈に其れ私を省みるの暇あらんや⁽³²⁾」失政の政治責任は直接天皇に集中し、新政府の権威失墜はそのまま維新国家の権威喪失につながり、革命もついに「下より圧倒され⁽³³⁾」終るであろう。「自然も政府の不決断より、尾大之弊を生じ、遂に不可束之次第と相成候而は、所詮中興之御成業如何有之哉と甚懸念仕候⁽³⁴⁾。」

このように根底的な危機を乗り切るために木戸のとった方針は、とりあえず目前の諸懸案を、一貫した論理と断固たる決意を示して処理し、主権者としての権威を生み出すことであつた。すなわち「誓而上に其権を握し、平均之勢

を作成し、妨るものは忽ち一刀兩断と申處はどこまでも不可失⁽³⁵⁾という独裁論（「ナポレオン論」）を目標に、「一先は威力を以御威稜⁽³⁶⁾」を立てることに活路を見出そうとしたのである。

この独裁論は、一方において当時の木戸の人民観にもとづいている。木戸の見るところ、「外庄」下にあつて急速に近代国家を建設しなければならぬという国家目標にたいし、「中人已下」の国民は、「只管目前之人情を以安心いたし候位之義に而、百年之利害を察し候而盡力仕候ものは萬人中に一人も難得次第」であり、「たとへ公論を以言を立候とも、未公論の何事たる、宇内之大勢の何事たるをしらざる之世の中」である。「皇国全体之有様を、是を一人にたとふるときは、氣之狂ひしものに而、則病人」である者を「常人」のように扱うことはできない。したがって、右のような課題を抱える政府にとって、「今日之急務は、且療じ且教へ」ることであり、「則、よろしむべし、知らしむへからず之場合」⁽³⁷⁾——独裁でなければならない。

その独裁は、より現実的には、權威創出を目的とするものであったがために、峻厳な性格を帯びることになった。

「所詮、曖昧姑息之御所致に相成居候而は、益天下之人民方向に迷ひ、終に確固たる御基礎難相立と奉存候。たとへ一時は暴令暴行など相唱へ候とも、将来御維持之目的相立候上は、天下戦慄仕候位に無之而は、決而御主意も徹底不仕、御威光も相立不申。終に萬民安堵之境に至り候事無覺束と奉存候。」⁽³⁸⁾「贗礼事件、不平士族、キリシタンの処分にたいする木戸の苛酷ともいうべき態度には、このような意図がこめられていたのである。」⁽³⁹⁾

だが、「尾大之弊」を生み出し、また諸問題の処理にたいし陰に陽に干渉して、新政府を「下より圧倒」する潜在的かつ最大の脅威は、「割拠」を続ける諸藩、ことに倒幕の推進力であつた雄藩の存在にはかならなかつた。このような権力基盤の不統合が、政治状況および政府の支配をつねに不安定なものにしていたのである。それゆえ、新政府の指導者がいかに確固たる決断をもつてしても、その結果の予測はつねに壁に突き当らざるをえない。決定を下す者

にとって、そこにあたかも歴史を支配する超越的なものが存在するかのよう感じられたとしても不思議はなかった。当時木戸が、重大な決定を下すにあたり、「天」や「天運」という超越的で非合理的な存在にしばしば言及し、それに結果を委ねざるをえなかったのは、このような事情による。

したがって、歴史の方向を新政府みずからの手で切り開くためには、究極的には、たとえそれが最大の危険を冒すものであれ、諸藩の「割拠」を止揚し、権力基盤を統合するほかない。「若、大令一発、諸藩忽生紛擾、於如乱大條理、実到天運之真に未回ものにして、人事之不在所能⁽⁴⁰⁾」とは、鳥羽・伏見の砲煙も消えやらぬ一八六八年（明治元）二月、いち早く三条実美に提出した版籍奉還建言書案の一節であるが、体制変革の一刻も早い実現は木戸の切望するところであった。「全国⁽⁴¹⁾の力を以全国を保護不致而は、所詮前途の目途も難相立⁽⁴¹⁾」という主張こそ、当時の木戸の思想の基本をなしていたのである。そのためには、いまや「尾大之弊」の根源と化した「道具」（藩）との格闘に、木戸は「用術施策」⁽⁴²⁾、「謀略を設け」⁽⁴³⁾、自らの能力を傾けなければならなかった。

そして、目標への「第一段」⁽⁴⁴⁾である版籍奉還を経、廃藩置県——「大條理」の実現に近づくにつれ、以上のような権力の不安定性も解消に向った。「大條理」の実現にともなって、木戸の思想の方向も、ゆっくりと転回する。急進主義からの離脱と、それと表裏して、政治主体拡大の認識がそれである。

(1) 「広沢兵助宛書翰」『木戸孝允文書』二、二六〇頁

(2) これは一八六七年（慶応三）八月、長崎における木戸、坂本、佐々木の申合わせである。（佐々木高行日記）『坂本龍馬関係文書』一、三四八頁

(3) 「徳川氏處分に関する建言書」『大久保利通文書』二、二七三頁

(4) 「岩倉具視宛書翰」、同右、一二二頁

(5) 「小松帯刀宛書翰」『木戸孝允文書』三、六二頁

- (6) 「小松帯刀宛書翰」、同右、三、六二頁
- (7) 「品川弥二郎宛書翰」、同右、二、三三九頁
- (8) 「小松帯刀宛書翰」、同右、三、六二頁
- (9) 同右
- (10) 一八六六年（慶応二）馬関戦争で戦死した白石資興（廉作、正一郎の弟）の葬儀に参列したときの一首。（『高杉晋作全集』下、五五六頁）
- (11) 大隈重信は木戸を評して次のように語っている。「大政維新は成就した。しかし第二の徳川幕府が出現してはならない。王政復古の名義だけ出来あがって、これに代わるべき権力者が、ただ人を代えたというだけではいけない、あくまでも王政の実を挙げなければならぬといふ、この大眼目を標的に、理論を一貫した識見は、明治の元勳中、ただ木戸あるだけだ。これが木戸の、卓絶した偉い長所と思う。
要するに木戸は主義の人で、この主張を極点まで実行しようとして、ときどき衝突が起った。しかしこれは、単に自分一個の主義を貫こうとしたばかりではなく、王事にささげつくして、命をおとした幾多の先輩、または志をとげることが出来なくて、地下に入った未知の同志にたいして、当然の責任と感じていたらしい。
このように真面目に、熱心に、誠実に、しかも公平に、物事を処断するので、聖上のご信用も、ことに厚かったように拝せられる。大久保もあれ程剛腸果斷、ことに激烈な衝突のあったにもかかわらず、常に木戸を推重されて、真実心底から推服していたようだ。
しいて欠点をいうと、感情に激しい一事である。いかにも喜怒哀楽に現われるという性質で、ことに順逆正邪の是非を、非常にやかましくいう方であるから、時の権臣が威を弄して、名爵を西郷の嗣子に封じたなど、もしも在天の靈が知ったならば、恐らく、墓石もゆらぐばかりに憤ることである」と察せられる。」（江森泰吉編『大隈伯百話』、木村毅監修『大隈重信は語る』（一六九頁所収）この評言からも、木戸の使命感の所在と、それが彼の倫理的な態度へ反映していることを知ることができよう。
- (12) 『木戸孝允日記』二、九五頁、一八七一年（明治四）九月六日の項
だが、つづけて「勤皇之義を奉しときの友人、盡（ク）骨となり、今日の交朋始終の意に不通もの多し。逐憶往事、想像将来、多是慨歎。」というように、このような木戸の使命感や倫理感は共鳴者を見出すことが困難であった。当時、木戸の周辺には彼を新政府の有力者、長州藩閥の代表者となんで接近してくる者がほとんどであった。出口を塞がれた心情は、木戸の心中に不満をうっ積させ、ときにそれは爆発し、その結果木戸の周辺に陰鬱な雰囲気をもたらすことになった。
- (13) 「大村益次郎宛書翰」「木戸孝允文書」三、二三〇—二二頁
- (14) 新政府は、困難が予想された倒幕を、意外なほど早期に実現しえたことから、志気の弛緩を生じた。木戸はこのような心理状態を見て、本来の目的に向って早急に意志を統一することが必要であることを強調した。「必竟、前途之事も、緩急之順序は可レ有之候得共、於ニ政府ニハ百

年之大方略は必相定居不_レ申而は、所詮皇國維持之目的無_二覺束_一候處、根軸不_二相立_一朝變暮移、益人々之方向を乱り候様之儀有_レ之候而は、終に瓦解に至り候外無_レ之……付而は病之熟するをまち、他日内地大戦争之実力をたくわえ候歟、又は根軸一定之處を相計り候もの歟。乍_レ然、此事今日に甚_二六ツケ數様奉_レ存候。」（大隈重信宛書翰『木戸孝允遺文集』六三頁）

(15) 『木戸孝允遺文集』、六三頁

(16) 「岩倉具視宛書翰」『木戸孝允文書』三、三二六頁

(17) 「岩倉具視宛書翰」、同右、三二三頁

(18) 大久保もまた岩倉に次のように訴えている。「即今内外ノ大難、皇國危急存亡ノ秋切迫スル事間不容髮。抑昨年来兵乱漸平、一時無事ノ形ヲ成トいえとも大小牧伯各孤疑を抱き、天下人心恟々然として、其乱るゝこと百萬之兵戈動くより可恐して、今日を平安ト心得候ハ床下之烈火燃出さるるを幸とするニ異ならず。豈可不思乎々々々々。」（岩倉公に呈せし意見書『大久保利通文書』三、一六一―一二頁）

(19) 『木戸孝允日記』一、一八四頁。この日、一八六九年（明治二）一月三〇日の項からは、「皇國の人情可治の難きを歎し、益平生所思の征韓の念勃々」と、内政上の危機感が征韓の意志へと反射していることがうかがわれる。

(20) 『木戸孝允日記』一、一三八頁。一八六八年（明治元）十一月八日の項

(21) 「野村泰介宛書翰」『木戸孝允文書』三、一八八頁

(22) 「大村益次郎宛書翰」、同右、三、二三三頁

(23) 「大村益次郎宛書翰」、同右、三、二三二頁

(24) 「伊藤博文宛書翰」、同右、三、四一三頁

(25) このリアリズムの要請の前では、「近隣ノ国ニシテ旧好ノ国」である朝鮮とは西欧諸国と同様に交際すべしという一時の開かれた姿勢はたちまちけしとんだ。

(26) この転換の背景について木戸自身が次のようにのべている。「大政復古の初め、封建未だ解けず、兵馬の政悉く諸侯に在り。朝廷空器を擁して天下に臨む。当時廟議天威の沮息せん事を畏れ、一時事を朝鮮に寄せ、新に新兵を編徴して以て武力を試みんと欲す。蓋し其意、傍はら内姦を庄倒するに在るのみ。而して明詔一下、諸侯各冊綬を収め天下肅然たり。議因て遂に止む。今日時勢前日に同しからず。其れ亦何そ余燼を吹て力を朝鮮に費すへけんや。」（征韓、征台速行の反対意見書『木戸孝允文書』八、一三三頁）

(27) 「版籍奉還に関する建言書案」、同右、八、二五頁

(28) 「岩倉具視宛書翰」、同右、三、三二三頁

(29) 「伊藤俊介に與ふ書」『木戸孝允遺文集』、六一頁

- (30) 「榎村正直宛書翰」、同右、三、三四三頁
- (31) 『木戸孝允日記』一、二四三頁。一八六九年（明治二）七月十日の項
- (32) 「政令一途に関する意見書」、同右、八、一〇二頁
- (33) 「榎村正直宛書翰」、同右、三、三四三頁
- (34) 「大木喬任宛書翰」、同右、三、二七七頁
- (35) 「大村益次郎宛書翰」、同右、三、三九三頁
- (36) 「大村益次郎宛書翰」、同右、三、三四九頁
- (37) 「大阪遷都に関する建言書案」、同右、八、二八—九頁
- (38) 「岩倉・三条宛、木戸書翰」『岩倉具視関係文書』、五、四〇頁
- (39) 不平士族の横行、彼らの流す政府批判にたいしては、「朝廷上確固、條理制然たる處を以、妨害をなし萬生之方向を迷亂いたし候ものは、大小衆寡を不問、明瞭御處置被為在度」(「大久保利通宛書翰」『木戸孝允文書』四、五六頁) キリシタン処分に関しては、「何分にも邪蘇之御所致は速に何と欺判然無御座而は不相濟事と奉存候。追々見込之相違より粗暴相働きしもの、心事におゐて毫も私心より不出ことと雖も、大典を犯し候ものは断然と御所致御座なくては、決而後來之事百事必瓦解と奉存候。」(「中井弘藏宛書翰」、同右、三、二七四頁)
- (40) 「版籍奉還に関する建言書案」、同右、八、二五頁。
- (41) 「河北俊弼宛書翰」、同右、四、二七七頁。
- (42) 『木戸孝允日記』二、六五頁。
- (43) 同右、二、七二頁。一八七一年（明治四）七月一四日の項
- (44) 同右、二、五一頁。一八七二年六月十一日の項

四

廃藩置県の実現と中央集権国家の形成は、維新のリーダーたちが幕末以来ともに追求してきた当面の政治目標の達

成を意味した。維新政府に集合したリーダーたちにとって、それは彼らが共有してきた目標が実現し、また消滅したということでもあった。国家にとって次の課題は、この新たな中央集権体制にいかにして近代国家の内実を注ぎ込むるかということであった。彼ら維新政権のリーダーたちにとって次の政治目標が時代の地平から現われ出てきたわけである。彼らはいまや、自分たちの共通のゴールを通過したと同時に、次のゴールへいかにして自国を導いていくかに、政治的使命の延長を見出し、同時にその事業の中に自らの政治生命の延長の可能性があることも直感した。彼らは日本の近代国家像を模索しはじめた。一八七一年（明治四）秋から約二年をかけた岩倉欧米使節団の派遣は、この新しい課題に向けて実施された政府の最初の大がかりな準備作業であった。大久保、木戸をはじめとする政治家たちは「近代国家」をこの目で確かめようと先を競って参加した。彼らは一時的に権力者の地位を他人に譲っても、使節団に同行することを志願したわけである。

欧米での一行は、精力的に諸国の官庁、議会、軍隊、工場、学校などの近代的施設を視察し、ホテルの自室にも在留外交官やその国の学者などを招いて、憲法をはじめとしてその国の政治制度の研究に没頭したのである。二年後、帰国した彼らは海外で得た知識をもとに各々の近代国家構想を打ち出した。それらの構想を一刻も早く実現すること——「内治優先」こそが、究極の目標である国家の対外的独立の維持のために不可欠であるとする彼らは、帰国早々に西郷ら征韓派と衝突し、後者を維新政府から追放した。

それらの構想は彼らの欧米での共通の体験が強力に影響しているために、力点の置き方や具体化のプロセスについての考え方にちがいはあったものの、将来における立憲政治・議会制度の計画、産業育成の必要性など共通のものも少くなかった。しかし征韓論争以後の政局も、共通の目標を基盤としていたかつてほど安定的なものではなかった。ことに新政権の主流派を構成する薩長両勢力のリーダーである大久保と木戸との対立は日まじに顕著となっていっ

た。中央集権国家の形成という共有の大目標（「大條理」）がともかくも実現したことは、両者の政治的提携の必要性を著しく減じたといえよう。これ以後、両者は国家が重大な危機に臨んだときにかぎって提携を復活するが、大久保が主導権を握った新政府の施政にたいして、長州藩閥のリーダーという重要な地位にある木戸はくり返し痛烈な批判を投げかけたのである。

木戸の批判の根底にあった視点は、尊攘派志士の時代からの彼の経験によって培われてきたものだが、それは支配に際して国民の占める比重を重視し、とりわけ国民の生活上の要求に細かい配慮を忘れない点が特徴的であった。ことに幕末、維新の変革期における膨大な政治的エネルギーの噴出は、木戸にとってまったく予測をこえたものであり、木戸はそこに政治主体が身分階層の下方にむかって拡大しつつある時代の状況を深刻に受けとめたのである。「御一新と申候ものも、只千や二千之人而已之尽力にてここに至り候と申訳にても無之候間、大に衆議を取り候規則は相立不申ては相済間敷歟と奉存候。」⁽¹⁾木戸が五ヶ条誓文の第一條冒頭「列侯會議ヲ興シ」を「広ク、會議ヲ興シ」と修正し「萬機公論ニ決ス可シ」とつづけたのも、このように拡大しつつある政治主体をもって諸藩の権力を否定し、結果的に中央政府の主権を確立せしめるという積極的な役割を期待するものであった。⁽²⁾そしてそこから、やがて次のように大胆な構想も打出されてきた。「如則今、優柔自重之外無之、優柔自重と雖も亦後日之目途無之而は、彌天下乱雜に可至、十年十五年廿年を計り一定之略被為定度、愚意を以奉存候に、此策に被為出候得は、先朝廷八百萬石を以御独立被為遊、暫諸藩之處は此儘に被成置、大に府縣に御着手相成、然して天下一般人民從來之束縛を解き、各自由の権をとりせ、朝廷之政自然と独出仕候ときは、終に諸藩も旧習を守る不能、随而朝廷へ附和仕候様可仕」⁽³⁾ここでは、国民の政治的エネルギーを解放し、その力によって旧体制の最終的な破壊を行うことが具体的に構想されている。大久保が国民の性格を「氣性薄弱」「無氣無力の人民」とみなし、つねに政府の強力なリーダーシップの必要性を説いたのにく

らべて、右のような木戸の認識は彼の思想を基本的に特色づけるものとなっていた。

このような木戸の認識は、明治初頭にあつては彼の急進主義にかくれて必ずしも顕在化していないが、廃藩置県の見通しが立ち中央集権国家の基盤がようやく固まってくるとともに、彼の政策立案の思考に次第に反映しはじめようになる。その結果、木戸の基本的な政策態度は、これまでの状況中の好機（勢）⁽⁴⁾を利した果断な、しかしつねにリスクをとまう急進主義から、「天下之事は十年を御期し被為在、漸を以大に御誘導」という「漸進主義」へと大きく転換する。⁽⁵⁾この転換は、「前途大目的之被為相立候上は、急迫に御進歩有之候ても、世上一統弱足のものは御沙汰通に得運ひ不申気味も可有之かと奉存候」というように、「世上一統弱足のもの」に配慮し国民の信頼を獲得することによって、権力基盤を拡大するとともに、革命前後の非日常的な状況と支配を収束し、維新国家を安定した成長段階にみちびこうとするものであつた。⁽⁷⁾この時期木戸が理想としたのは、「十年の策相立、人民に信を不失、政令益行れ、人民彌安伏する」というように、政府の一貫した政策の遂行と国民の政府にたいする信頼とがたがいに反映しあうような安定した支配であつた。

だからといって木戸は、政治指導が国民の要求に全くよりかかるべきであると考えていたわけではもとよりない。「漸進主義」も、状況の推移を客観的に考量しながら維新国家をその確立へと操作し導いていくリアリズムの表現であつたといえる。「漸進主義」の構造は、一方では諸政策の基本方針に一貫性と持続性をもたせようとする「條理」追求の執拗な思考と、他方では各時点における政策遂行が現実⁽⁸⁾に及ぼす効果について考量を加えながら目標実現への具體的計画を調整する「緩急」自在な思考という二極の思考の緊張関係から成り立っている。しかも「必竟、緩嚴等之議論種々雖有之、其元は只條理を貫くと不貫にあり。緩嚴皆條理中より起り、緩嚴よりして條理を論するの理なし」と、「條理」の基本的優位性が確認されている。すなわち政府は政策の実際効果——国民の反応、適合力に十分な

注意を払いながら、そしてそのためにも長期にわたり一貫した政策方針をとるべきであるというのが、「漸進主義」の背景にある木戸の思想であった。

かえりみるに、わが国においては封建時代をつうじて長年月「武臣制を壇ニセシ」ために、国民は政治的社会的な経験にとぼしい。それゆえに政府は国家の近代化にあたって国民を物質的、精神的に保護、督励して「心切に総て着手」⁽¹⁰⁾し、国家の将来を切り開いていかなければならない。また、元来「人は習慣の動物」⁽¹¹⁾であり、それゆえに国民を誘導するにあたっては、政策が国民の生活におよぼす効果をたしかめながら、「一事一行着実」に近代化を進めていかなければならない。けっして「欧米等にて数十年之歳月を費せし事業を一月位之布告を以模擬」⁽¹²⁾しようとは企ててはならないのである。

このようないわば政治的世界を構成する日常的要素の重視は、次のような木戸の政治観に色濃く反映しており、それは結論として「漸進主義」へ導かれている。「抑も政治の世に行はるゝや、一日も停止すべきに非ず。猶、水の下流に逝く、須臾も之を壅塞す可からざるか如し。其際、利を起し、害を除き、善を奨め、弊を去るや、各々其実際に応じて順序を設け、以て之を釐正し、漸く其化域に至らしむべし。其期の遅速は、独り政府処分之當否に依る而已。凡そ海の内外を論せず各国政治の沿革して良法善政を得るを見るに、皆此法に由りて施行せざるはなし。但、不世出の英雄、時変に遭遇し干戈を以て一世を屈服するか如きは、又常理を以て論す可きにあらす。若し實際の得失當否を顧みず、遽に政体制度を变革し徒らに名称に従ふて其新政新法を一旦に施行せんと欲する者は、大概其弊害を増加して其利益あるを見ず。仮令萬全の新法、最良の新法なりといへども、猶従法虚名に属す。況や廟議末た萬全の地に及ばず、叡良の度に至らざるに於てをや。」⁽¹³⁾それゆえに「政治は實地に著意して、其妨碍なきを主とし、而して漸を以て之を舉行するに如くはな」⁽¹³⁾いのである。

木戸の大久保路線批判が表面化するの、一八七四年（明治七）大久保が台湾征討に乗り出したときにはじまる。

木戸はこの決定を不満として辞表を提出して政府を去り、薩長両藩閥の指導者の間の不和は公然たるものとなった。

木戸の不満の理由は、征韓論争のときと同様に内治優先の立場から、外征は「無算の大博奕」⁽¹⁴⁾であり、その財政的負担は国内の近代化を遅らせ、国民の負担を加重し、ことに台湾出兵が口火となって中国と戦端を開くことにでもなれば、国内近代化に重大な破綻をきたすのみならず、維新の变革そのものが水泡に帰する危険を内包しているということにあった。⁽¹⁵⁾また、わずか半年前にはともに内治優先論をもって征韓派を政府から追放した大久保らが、「行がかり」から立場を逆転して外征に踏み切ったことは、彼らにたいする木戸の不信感を決定的なものにした。木戸から見れば、彼らは「相場心を以企」⁽¹⁶⁾て、計画の矛盾を衝かれると自らの生命とひきかえに自説を押し通す「野蠻」⁽¹⁷⁾さをもつ「驕慢先生」⁽¹⁶⁾たちであった。

台湾征討の一件のみならず、政府はとかく着実で一貫した政治指導を欠くことが、木戸の大久保路線批判の第一点であった。そもそも政府は「寄合所帯」⁽¹⁸⁾で意志の統一を欠いていたが、他方ではたまたま「一時気発の説」が唱えられれば、前後の見さかいかもなくそれに「雷同」する欠陥をもっていた。そのため政府の方針は一貫性を欠き、「時々漸進中に急進を生し、急進中退歩を生し、一派の不動了簡と申もの乏敷」⁽¹⁹⁾という結果に陥っているというのが木戸の批判であった。政府のこのような欠陥にたいして木戸が考えた対策は、「何分にも輕挙躁進は制度を以防拒候外いたし方有之間敷と奉存候」⁽²⁰⁾と述べているように、政策決定過程を制度化することによってその客観性と非人格性および続継性と計画性とを保障し、支配から恣意性を除去することにあった。木戸は維新政府指導者の中でもっとも早く官僚制度をはじめとする政府機構の整備の必要性を唱えていたが、⁽²¹⁾この事件以来大久保の政治指導力に対抗するためにも、いよいよ切実にその必要性を感じるようになっていった。⁽²²⁾翌一八七五年（明治八）、大久保の懇願に応じて約

一年ぶりに政府に復帰することになったいわゆる大阪会議の席上で、大久保に政府機構の整備を骨子とする諸制度確立を約束せしめたことにも、右のような意図がうかがえる。

他方大久保は、征韓論争での勝利にひきつづき、全権弁理大臣として北京へ赴き台湾出兵後における中国との困難な外交問題を持前のねばり強さで有利な解決に導くことに成功してからは、新政府におけるヘゲモニーを完全に掌握するに至った。そしてそれとともに、大久保は天皇の政治的操作を政局収拾と人心掌握の切り札として用いながら、自己の政治指導にいいよ自信を深めていたのである。このように自己の強力なリーダーシップを自負する大久保にとって、その能力が発揮さるべき政治的世界はまず第一に政府部内人事の領域を意味し、それゆえ彼にとっては何ものによっても制約されない可塑性をもつものと考えられ、支配もまたそれに見合ったものでなければならなかった。「即今維新之際に当りては、昨日之一言に拘泥して、今日も明日も来年も固執いたし候は、所謂頑之字を免れず。それ世中を、経過するに、は活用といえるものがなく、ては一步も被行ものに無之。かくいえば益御嘲笑可有之歟も難候得共、是小子多年経験上より了得したる妙處にして、恐くは傍觀之窺ひ知る所にあらざるべし。君子見機動歟之古言も有之候⁽²³⁾」幕末、維新の動乱の中でつねに重大な政治的駆引きを担当した大久保がこのような政治観を抱いたのはむしろ当然であった。だが同時に、大久保が自己のリーダーシップを自負し、また後述するように彼が指揮する内務省の殖産興業政策路線の正当性に自信を深めていくにつれ、彼にとっての政治的世界そのものは、自己の政策実現のために政府部内の人間関係を調整することに——ふたたび「実務」の世界に還元されていた。それにたいする木戸の特徴は政治状況のもつ多面性を視野に入れ、それをできるかぎり合理的な支配の中に組みこもうとすることであった。木戸における支配の合理性への志向と大久保におけるリーダーシップの優位性という両者の政治観の相違は、無自覚のうちにも彼らの政治的、思想的対立の根底をなしていたであらう⁽²⁴⁾。

木戸の大久保路線批判の第二点は、その「急進主義」的近代化政策に向けられた。この問題に入るまえに、まず木戸の近代化、「文明開化」一般についての思想を考えておく必要がある。維新後、「文明開化」の風潮は東京を中心に沸騰し、時代の奔流となっていた。政治主体の拡大についてと同様、木戸は国民一般が自発的に近代化に適合していく能力をもっていることを疑わなかった。「漸々開化に趣き候様御着手、月を逐ひ日を逐ひ、民之束縛をとき自由を得させ候様に御手段有之候ときは、誓而下より開化に馳せ、左ほど御苦心無之候而御運之御事と奉存候。」⁽²⁵⁾だがそれと同時に、木戸はこの風潮が見すごすことのできない重大な弊害をもたらしつつあることに注目していた。木戸によれば、その弊害はまず国民がひたすら私的利益のみを追求する風潮となつてあらわれていた。国民の多くは「只管今日の利に而已相馳せ」⁽²⁶⁾、社会には「僥倖而已を心懸け、自然輕燥浮薄之風」⁽²⁷⁾が弥漫している。しかし木戸はこのような傾向は西欧文化の受容そのものに原因があるのではなく、したがって近代化の必然的な結果ではないと考えた。木戸によれば、西欧文明を性急かつ表面的に模倣しているというのが「文明開化」の現状であり、右のような弊害の第一の原因であつた。木戸が欧米で得た知識によれば、かの国々においてはキリスト教の布教が「密にして田舎に至るまで行届」⁽²⁸⁾き、その文明の精神的バックボーンになっているのにたいして、わが国の現状は「儒も佛も耶も何も空物にて、只開化々と名利之開化」⁽²⁸⁾に終始する有様である。西欧文明の受容をリードすべき洋学者、「開化先生」の多くもただひたすら「忠義仁礼之風を弘」⁽²⁹⁾うことにやつきとなり、このような風潮を助長している。まことに「前途只此弊而已を残し候様成行候而は萬世之遺憾」⁽²⁹⁾と木戸は歎ずるのである。

木戸にとって右の弊害が内包している、より深刻な問題は、このような風潮が維新の変革の理念とは別の方向へ国民をおし流そうとしていることであつた。「二十年来千辛萬苦之境を不顧」⁽³⁰⁾、「国を愛するの心薄く」⁽³¹⁾しつつあることに、木戸は危機を感じていた。このような危機を未然にふせぎ弊害を矯正して、国家を「眞之開化」に導くために

は、国民全般を着実に、「漸進的」に近代化に適合させていかなければならないと彼は考え、具体的には小学教育に大きな期待を寄せた。⁽³²⁾ 木戸は、前述のような「漸進主義」の思想にもとづいて、「国は人より成立候ものにつき、たとえ手間取候とも着実に漸進いたし、退歩いたさざる様心懸候方、総体の幸福」⁽³³⁾という「漸進的」開化の立場をとり、「頑固の親父が一枚つゝ一枚つゝへげ候て、真に開け」⁽³⁴⁾ていくように、着実に近代化していくべきであると考えた。同時に、そこには、対外的独立の維持という近代化の目的のためには、少数の洋学者や西洋通たちの皮相な主張に国民が「附和雷同」するという状態は好ましいものではないという考えから、前述の権力基盤拡大の構想と並行して、国民「一般の、開化を進め、一般の人智を明発」⁽³⁵⁾すべきであるという意味がこめられていた。さらに木戸の小学教育の構想には、教育内容においてとりわけ「脩身の学は欧州の十倍もいたさせたく、文部へもこの道理を心切に相すゝめ度」⁽³⁶⁾というように、「開化」にともなう精神的空洞を埋め、ひいては「国を愛するの心」を生み出そうという国家的意図も内包されていたといえる。⁽³⁷⁾

このように「漸進的」な開化を主張した木戸は、その点で、ロシアが「百年を経而徐々進歩に趣」⁽³⁸⁾いたことを日本の近代化の手本と考えていた。そして日本も「漸進的」な近代化によって必ず「世界第一等の間入」⁽³⁹⁾ができることを確信していた。実際に「小学校などにて少年の進歩を目撃候へは、実に人ほどすゝみ候ものはこれなく」⁽⁴⁰⁾というように、国民の「進歩」は十分に期待できた。もとよりアメリカ人やドイツ人といえども日本人と「毫も異なるものない」のであり、「恨むるところは、只数百年国を鎖し、自ら宇内の形勢に暗く、また四方の学問を研窮するの暇」⁽⁴¹⁾なかったことである。つまるところ彼我の差は「只学、不学にある而已」⁽⁴²⁾である。ここには、西欧文明に盲目的に追従するのではなく、国家の対外的独立の維持という目的にそって主体的に近代化のコースを選択するという木戸の姿勢がみられよう。「欧羅巴州何物ぞ、我只独り朝寝をしたり、睡足、今将起、少女と小兒たもとゝすそにからむ」⁽⁴³⁾とは、こ

のようなきの彼の心境であらう。

ところで、このような近代化論に立つ木戸は、板垣退助ら自由民権派の思想と運動をどのように評価しただろうか。板垣らは、木戸が征台の役の決定を不満として政府を去った一八七四年（明治七）に民選議院設立建白書を世に問い、大久保らの有司専制、ことに国民にたいする「政令百端、朝出暮改、政刑情実に成り、賞罰愛憎に出づ、言路壅蔽、困苦告るなし」という⁽⁴⁴⁾庄政を批難し、国民の権利と自由を擁護し、民選議院によって政府と国民とが一体となるべきことを主張していた。このころから板垣はじめ小室信夫、古沢滋ら民権派のブレンは、同じく政府を去りかつてより議会主義の構想を説いていた木戸に接近し、しきりに民選議院構想を説いていた。木戸も、将来における立法議会の必要性について、彼らと大筋において合意した。⁽⁴⁵⁾しかし、まもなく彼らと意見の衝突が生じ、木戸は民権派の動きに不信と警戒の気持をつよめていった。

民権派にたいする木戸の批判の第一点は、その「急進」的性格にたいするものであった。木戸からみれば、小室や古沢が英国での「ききかじり」を主張し、板垣も「英の政体々々々々」というけれども、そもそも政治体制というのはその国の政治的風土に根づいて「自然に成就する」⁽⁴⁶⁾ものである。板垣の主張は「書物通に、今日之人情も不顧、文明之度も不察、事務運轉之機も不悟、歩せすして富岳は只越さるると口に而申せし諺之如」⁽⁴⁷⁾きものである。まして「公然、共和政治等之事を議」す結果、天皇制の否定に行きつくようなことは、木戸にとって「死すとも瞑目する不能」⁽⁴⁸⁾る重大事であった。

木戸の民権論批判の第二点は、彼らの思想と行動が一貫性を欠いていることに向けられた。木戸によれば、建白書中の「政令百端、朝出暮改」以下の政府批判はたしかに⁽⁴⁹⁾的を得ているが、しかし現在の政府は多少ともその弊害に気づきはじめており、反省の色も見えつつある。しかるに数々の変革を一挙に断行し「政令百端、朝出暮改」したのは、

むしろ板垣が西郷ら征韓派とともに在任中の留守政府だったのではないかというのが木戸の批判であった。一八七五年（明治八）内閣と省卿の分離を主張する板垣が、旧藩主層の封建的利益の復活を主張する立場から政府に不満を抱いていた左大臣島津久光とむすぶと、板垣らにたいする木戸の不信は決定的となった。主張を異にする両者が一致するのは、結局彼らの動機がたんなる不平にもとづくからにはかならないと木戸には思われた。「ポルチックなどゝ申處より之論は、多くは付ものに而、元来是等之論は不平種にいたし候様之次第」⁽⁵⁰⁾、「其不平の爲めに変移無窮、其品位實に鄙劣なる、本邦の将来を推考し不堪慨嘆なり。板垣退助、河野敏謙等は皆民権家にして封建家と合せり」⁽⁵¹⁾。彼らの「政治」性、ことにかつて戊辰戦争とともに戦った板垣の「背信」行為に、木戸は強い不信感を抱いたといえよう。結局、民権派にたいする木戸の評価は次のようなところにおちついた。「本邦人の大弊は、何分あたまがちにて固有堪忍の性質はなほ乏しく、一時の名利雷同奔馳。それゆえ前途の目的と申すものは一向定めず、ただただ攘夷論の反対にて民権の急を論ずるをのみ相唱候もの少なからず」⁽⁵²⁾。木戸には、自由民権運動も軽薄で付和雷同的な開化の風潮の典型以上のものとは思えなかったということであろう。

さて、問題は久保路線にむけられた木戸の「急進」主義批判であるが、木戸によれば、急進の開化の弊害は維新政府にこそ集中していた。「口頭上は人民急進に過候事不少候得共、行政上は折節政府之方却而大急進有之。後来之困難如何と煩念候事も不少」⁽⁵³⁾。急進的性格という点では、政府もそれに対立する民権派もなんら異なるところはなかった。「前年民選議院の論起しより、政府に急進・漸進の二党あり。今の政府は所謂漸進黨にして、政府亦漸進を以て自ら命せり。然れとも孝允を以て之を視るに、唯民選議院を説かざるのみ。其急進たるは一なり。何そや。政府、民選議院（派）は未だ以て不開の人民に施すに至つては、其開、不開を問はず、適、不適を論せず、直ちに我の是とする所を以て之に加え、而又其成を急にす。是急進に非ずして何ぞ。其漸を以て自ら命し、人亦漸を以て之を目すと雖

とも、未其漸たるを見ざるなり。所謂漸進なるものは如何。必や内政を修め、能く其実情を得て、以て漸く進むものなり。⁽⁵⁴⁾

木戸が批判した政府の「急進」主義とは、いうまでもなく維新政府の近代化政策であった。より具体的には、大久保の率いる内務省によって推進された殖産興業政策であった。岩倉使節団とともに渡欧した大久保は、そこで「近代国家」への牽引力が近代産業であることを目撃した。産業革命の象徴である蒸気機関車の力強い疾走ほど、大久保にとって頼もしく思えたものはなかった。「製作場ノ盛ナル事ハ曾テ傳聞スル處ヨリ一層増り、至ル處黒烟天ニ朝シ、大小之製作所ヲ設ケサルナシ。英ノ富強ナル所以ヲ知ルニ足ルナリ。……凡右首府々々ノ貿易或ハ工作ノ盛大ナル、五十年以来ノ事ナルヨシ。然レハ皆蒸汽車發明アツテ后ノ義ニテ、世ノ開化ヲ進メ貿易ヲ起スモ半ハ瀛車ニ基スルト相見得候ナリ。」⁽⁵⁵⁾ 帰国した大久保は、内外諸事件の処置に忙殺されながらも、国内の近代的産業育成という目標は彼の脳裏に焼きついてはなれなかった。大久保にとって、殖産興業こそ国内近代化のきめ手であり、「国勢急中の最も急なる」⁽⁵⁶⁾ 課題であった。大久保は、定評ある彼の政治的情熱と手腕、鉄のごとく固い意志のすべてを殖産興業に注ぎ込んだと言っても過言ではあるまい。彼が内務省に一大官僚群を結集したのも、内務省をしてこの政策を推進する「蒸汽車」⁽⁵⁷⁾ たらしめるためにほかならなかった。大久保にはとうてい、このように緊急な課題を一刻たりとも「無気無力の人民」⁽⁵⁷⁾ の手に委ねることはできなかった。たとえ強引ではあっても、自ら率いる内務省の強力なリーダーシップによって、確実かつ速やかに目標を達成しなければならなかった。「若、之を政府の務に非ずとし、措いて人民の長進に任せ、荏苒数歳を経過せば、其衰状の底止する所、豈に窮極あるへけんや。此れ国勢急中の最も急なるものにして、政理の正則に非ずと雖も、亦時勢の変法に於て欠くへからざるの要務と云はざるを得ず。」⁽⁵⁶⁾

このように変則も承知の上で強行された殖産興業政策と、それを中心とする政府の急激な近代化政策——「富国強

兵」策は、当然に様々の摩擦を国内に生み出した。そしてそのしわよせの多くは、農民や旧士族をはじめとする国民の上に重い負担となっておおいかぶさっていった。木戸の政府批判は、まずこのように急激な近代化——西欧化政策のもとたらず弊害を指摘している。「政治上の事も兎角一定之目的無之、専ら文明を擬似し、却て人民上之権理を妨け、或は暴に数百年之慣習も一朝に破壊し、国と人との幸福を失し候事も不少」⁽⁵⁸⁾

木戸も、「強は富より生し候ものにて、富国の本相立たざるときは、前途いかんともいたしがたく候」⁽⁵⁹⁾というように、国家の対外的独立の維持という究極目標のためには、産業を育成し「富国強兵」を目ざすことに異論はなかった。しかし、国家発展の担い手である国民の生活基盤を侵す、このように急激な西欧化は、むしろ産業の健全な発展を妨げている。その影響は、ことに「開化」のしわよせをうけた地方産業の衰退となってあらわれてきている、「東京開化候とも此儘に而は全国ぢん虚」⁽⁶⁰⁾になると木戸は観察していた。⁽⁶¹⁾「何分にも富国の本は物産繁盛いたさずてはいかんともいたしかたく、近來年々皇国の物産減少には、実に歎の至りにござ候。これらは開化の形をのみ模し候弊害、幾分か今日に生し候事これあり候と相考へ申候」⁽⁵⁹⁾。大久保の近代化政策は、日本の実情を無視し、伊藤博文はじめ功名心に駆られた内務官僚たちの机上論——「皮膚の條理」⁽⁶²⁾を強行するものであった。木戸はこれを不満として、大久保を内務省から引き離すべく建言した。その理由を、日記に次のように記している。「大久保、内務を奉職して無益となすものは、大概の事皆判任の詮議に出て、都下に種々勸^{マツ}の事を企て、数多の局を設け、大に土木を起すといえども、真に民力の復する根本に注意するもの甚稀なり。故にその結果いかんを知らず、ただ木に椽りて魚を求むるが如きを恐る。常に人民に直接する改革は務て俄急を厭ふ」⁽⁶³⁾。

木戸の大久保路線批判は、後者の急激な近代化政策が国民生活の破壊をもたらし、それにたいして抵抗する農民一揆に対しては容赦ない弾圧によって応えようとしたとき、その極点に達した。自らの政策遂行を阻まれたことによつ

てうっ積してきた不満は、国民と自己とを一体視することによってそのはけ口を見出し、一挙に爆発したかのようであった。木戸によれば大久保および内務省が先導する政府の国内近代化政策は、現実には「人の生活なども塵芥のごとく相心得、ただ／＼筆先きにて数千万の生活上より慣習等も容易に軽々に破却⁽⁶⁴⁾」し、「軍さ気取にて行政上の改革をいた⁽⁶⁵⁾」している。そして一方では、このような急激かつ現実を無視した改革がひきおこす庄迫に耐えきれず、「生活に苦しみ、終に失活路、不得止愁訴歎願、少々竹槍位携へ候ものを（政府は）元辺にてぱち々と撃殺⁽⁶⁶⁾」しているのではないか。このように「固結⁽⁶⁷⁾」した態度をとることは、維新政府にとっても危険な結果をもたらすことになる。それはつまり、「およそ人民はその慣習に生活せざる者少し。これを以て遽にその慣習を変すれば、生活の道を失うもまた自然の勢にして、再び反射する時は、政府また自ら他日大に患害を受るものあ⁽⁶⁸⁾」るからである。国民の生活は無視し、「皮膚の条理」を論じて「軽拳急進」する政府の「急進」主義の結果、国民が「挙て謀反人と相成候外これなき時は、日本滅亡の時⁽⁶⁹⁾」にはかならないと木戸は考えた。これも、彼ら現在政府にある人々が維新の艱難をなめ足りず、そこから十分な教訓を得ることができなかったからである。⁽⁷⁰⁾

それにしても、国民の身になって考えるとき、政府による「竹槍連の征伐は身の毛がよだち申候⁽⁶⁵⁾」というのも、木戸のいつわらざる気持であった。彼は、大久保路線にたいする批判と不満をつのらせていくにつれて、維新の意義を国民生活の保護という点に重きを置いて解釈するようになっていった。「御一新以来、ただただ孝允の忘る能わざるは治民の一条にて……御一新の戦争も治民の事なり。佐賀・肥後・長州そのほか撃殺候も治民のためなり。しかるに何故に治民の策には輕易の決断を貴ひ、過酷の御處分に陥り候や。」⁽⁷¹⁾こう考えるにつけても、「人民の生活上より歎訴歎願候は、いかにもあわれ千萬、謀反いたし候ても加勢いたしたきこち出申候。」⁽⁷²⁾というのが晩年の木戸の心情であった。

- (1) 「野村素介宛書翰」『木戸孝允文書』三、一八六頁
 - (2) 大久保利謙「五ヶ条の誓文に関する一考察」(『歴史地理』第八八卷一二、および『論集・日本歴史9・明治維新』所収) 参照。
 - (3) 「三条実美宛書翰」『木戸孝允文書』四、一〇三—四頁
 - (4) 「岩倉具視宛書翰」、同右、四、九九頁
 - (5) 後年木戸は、急進主義から「漸進主義」への転換を次のように回顧している。「倩已往将来を想思候得ば、御一新已来も朝廷上なり落上なり内外紛紜之際、僅々凡大綱と可相成ものは大果断なくて元より不叶事と存候得共、他は一般之情勢を想察し着実漸進を可主と持説主張候得共、始終かきませられ云々」(『井上馨宛書翰』、同右、三九四頁)
 - (6) 「大久保利通宛書翰」、同右、四、五〇頁
 - (7) すでに一八六八年(明治元)、木戸は国家の対外的独立という究極的目的のためにも、国民の自発的服従が必要であることを主張し、またそれが近代国家として当然の方針であると説いている。「朝廷今日之御力而已に而は、決而往々皇国之御備へも不相立、隨而御維持も万々不相成辺を、各国之自国を保護いたし候に付而は、邦内之人民名々其力を合せ、漸其国之守備を立、永統之策を廻らし候次第之廉々を挙げ、先以信切に人民にも相示し置、左候而漸を以御手を被立候は、必天下に被行可申歟。第一に府県之知事は不及申、判事已下にては此處へは屹度着眼を仕、其心得に而今日政事を補佐不仕而は、決而不相成事と奉存候。」(『後藤象二郎宛書翰』、同右、三、一四七—八頁) 木戸のこの構想が、幕末の長州藩における経験をもとにしていることは明らかであろう。
- それゆえに木戸にとって、維新前後の非日常的状况をどのように收拾するかは、一面ではそれがアナーキーになだれこむのを恐れながらも、他面そこに噴出した政治的エネルギーが国家の対外的独立を維持するために發揮されることを期待するがゆえに、重大かつ慎重を要する課題であった。「天下之事、一平定よりも一平定後天下之大方向を相定め、皇国一円之正気を以万国に冠絶たる規模御定之事万々御六つヶ數事歟と痛按之至に御座候。二百余年鬱屈之氣一時如斯鼓動仕候而は、此後殺氣之所致一大事に御座候。大に皇国之御為とも未曾有之大害とも相成申候。」(『久保松太郎宛書翰』、同右、三、一〇四頁) ここに見られるように、木戸は時代の雰囲気(「氣」)を重視し、またそれに敏感に対応した政治家である。ことにこの時期の木戸は、「氣」をいわば社会心理として客観的に認識し、かつある程度操作することの可能な対象として考えるようになっていた。
- (8) 『木戸孝允日記』一、三四五頁。一八七〇年(明治三)四月一八日の項
 - (9) 同右、二、二二頁。一八七一年四月一四日の項
 - (10) 『伊藤博文宛書翰』『木戸孝允文書』五、三二五頁
 - (11) 『内海忠勝宛書翰』、同右、五、二二八頁

(12) 国民の「習慣」を配慮するがゆえに、ここでも木戸は「漸進主義」をとるべきであると考えた。「三百余之政府を立、三百年來養來候故、人情風俗は不及申、数里相隔候而も言語までも異同有之候様之事に付、実に迅速には難相進、十年を待候事と則決之事と区分を成し着手不仕而は、却而於実事上及遅延候事も可有之歟に相考へ申候。」(伊藤博文宛書翰、同右、四、一九二—三頁)

(13) 「立法・行政に関する建言書」、同右、八、五四—五頁

(14) 「河瀬秀治宛書翰」、同右、五、三六八頁

(15) 木戸は心中の不満を腹心の者に次のように吐露している。「台湾一條より支那との戦争は百萬遺憾至極。是に而五、六十年歟、二、三百年歟、日本之進歩を妨害いたし申候。……残念なり。くやしくてたまり不申候。於于爰は弟も世に望みは最早無之候。数十年之事も至于此候而皆属水泡候。」(青木周藏宛書翰、同右、五、三三九頁)

(16) 「井上馨宛書翰」、同右、五、四二〇頁

(17) 「榎村正直宛書翰」、同右、五、三七三頁

(18) 「尾崎三良宛書翰」、同右、六、二二二頁

(19) 「青木周藏宛書翰」、同右、六、一九一頁

(20) 「伊勢華宛書翰」、同右、六、六一頁。木戸は政策の決定が一部の煽動や圧力によって左右される現状を「全バルバリー之有様」であると嘆き、政治が制度を通じて合理的に行われる状態を「文明」的であるとしている。(森寺常德宛書翰、同右、五、七六頁参照)

(21) 一八七一年(明治四) 木戸は制度調査委員会議長として政府機構の整備改革を行ったが、彼が意図したのは政府の決定を客観的な判断にもとづかせることであつた。「今日漸政府上の位置相決せり。是、諸省の章程等相定る所あらむ。從來大に可歎は、政府上免角論の是非を不分、人の衆寡、聲の高低に随ひ衆人の氣を迎へ、事を決し、或は事を設る事不少。余、多年大に是を憂ひ、常に不如意、此度此機に乘し、諸省等の事よりして改此弊事多し。為國家聊安するものあり。」(『木戸孝允日記』二、七四頁。一八七一年七月十九日の項)

(22) たとえば、一八七〇年(明治三) 一〇月の「政令一途に関する意見書」では、官僚制度の理想形態についてのべている。「善く國を治むる者は、必ず遠大不易の略有り。全權之を包括し、分任之を推戴し、官路整肅一體相属し、事に応じて極り無き、猶泉の斜に奔るか如し。混々然、次序ありて而して乱れず。」(『木戸孝允文書』八、九八頁) ここでは官僚制度の統一性、能率性が高く評価されている。現実がこの逆であるとも木戸が考えていたことはいうまでもない。「曰く、内朝、外廷を制する能はず。七省、府藩県を制する能はず。府藩県以下循々乎、皆之に倣ふ。是故に庶司群僚、各其局に拠て而して樹立し、私意専らに制し」、「合して雷同連朋と為り、離て怨讐仇讐と為」(同右、八、九九頁) といったのが、木戸の目撃した維新政府の実情であつた。

大久保と木戸は、たがいに政治的能力の点で高く評価しあつており、大久保は危機に臨むと、政府内部の結束を固める必要もあつて、つね

に木戸の助力を求めている。「大久保参議は沈重謹慎之性質に而、不拔之志は多年御熟知も被為在候通に付……」(『岩倉具視宛書翰』、『木戸孝允文書』、五、五九頁)「大本を着眼し、始終を慮り、治術ニ堪候当時之人物ハ木戸其人ナランカ。」(『岩倉公に呈せし意見書』(『大久保利通文書』、三、一四二頁))

(23) 「税所篇への書翰」『大久保利通文書』六、二九一頁

(24) もちろん両者の対立の重要な原因として薩長両藩閥のリーダーとしてのわだかまりがあったことはいうまでもない。ことに木戸が幕末において薩摩藩にたいして抱いた不信任は根強く、一八六三年(文久三)の八・一八クーデターでの「薩賊」の記憶は終生消え去ることがなかった。新政府で薩藩出身者と協調することを余儀なくされて以後も、木戸はつねに彼らにたいする警戒心を失っていない。ことに当時政府内で大久保をリーダーとする薩摩閥が政治力をふるって主導権をにぎり、自説がしりぞけられる状況にいらだちを抑えきれなかった。「薩説には大抵行われざるなく、前日非とするもの、多くは附和雷同、自ら一つのパーチャーをなせり。」(『井上馨宛書翰』、『木戸孝允文書』六、三九四―五頁)また薩摩閥の背後にあつて彼らの発言力を作り出している鹿児島が、中央政府のきめた範囲をこえて強大な軍事力を保有して半「割拠」の状態をつづけ、彼らを通じて特別措置(たとえば一八七六年の金禄公債発行条例における)をひき出していることも、木戸の大きな不満であつた。木戸は、このような不平等を改め、全国「公平の施設」を行うべきであるという中央政府官僚としての原則論をくり返し主張した。

(25) 「岩倉具視宛書翰」『木戸孝允文書』四、一〇〇頁

(26) 「河北俊卿宛書翰」、同右、四、二七九頁

(27) 「渡辺昇宛書翰」、同右、四、三一〇頁

(28) 「柏村信宛書翰」、同右、四、三六六頁

(29) 「杉山孝敏宛書翰」、同右、四、三四〇頁

(30) 「渡辺昇宛書翰」、同右、四、三一〇頁

(31) 「河北俊卿宛書翰」、同右、四、二七九頁

(32) たとえば「我今日之文明は眞之文明にあらず。我今日の開化は眞之開化にあらず。十年之後其病を防ぐ、只学校の眞学校を起すにあり。」(『杉山孝敏宛書翰』、同右、四、三三〇頁)

(33) 「品川弥二郎宛書翰」、同右、七、三六頁

(34) 「井上馨宛書翰」、同右、七、七二頁

(35) 『木戸孝允日記』二、一二六頁。一八七一年二月二五日の項

- (36) 「杉山孝敏宛書翰」、『木戸孝允文書』七、六五頁
- (37) 「杉山孝敏宛書翰」同右、四、三二〇頁参照
- (38) 「杉山孝敏宛書翰」同右、四、三六九頁
- (39) 「品川弥二郎宛書翰」同右、七、三六頁
- (40) 「井上馨宛書翰」同右、七、七〇頁
- (41) 「木戸孝允日記」二、三三三頁。一八七三年（明治六）三月一五日の項
- (42) 「杉山孝敏宛書翰」『木戸孝允文書』四、三三二頁
- (43) 「木戸孝允日記」一、二八七頁、一八六九年（明治二）十一月六日の項
- (44) 「民選議院設立建白書」『自由党史』岩波文庫版、八九頁
- (45) 「木戸孝允日記」三、一四六頁。一八七五年（明治八）一月三〇日の項参照。
- (46) 「井上馨宛書翰」『木戸孝允文書』六、五三頁。木戸は政治制度が各国の政治的風土に根づいて形成され、その影響を強くうけるものであると考えていた。彼が何礼之に命じてモンテスキューの『法の精神』を翻訳させた『万法精理』として一八七五年に刊行。木戸が序言を書いた。のも、その風土理論に注目したからであろう。この点については大久保も同じ考えをもっており、両者に共通した基本的な政治制度観であった。「抑、政ノ体タル、君主民主ノ異ナルアリト雖トモ、大凡土地、風俗、人情、時勢ニ隨テ自然ニ之レヲ成立スル者ニシテ、敢テ今ヨリ之レヲ構成スヘキモノニ非ス。」（『立憲政体に関する意見書』『大久保利通文書』五、一八四頁）
- (47) 「大隈重信宛書翰」『木戸孝允遺文集』、一〇一頁。この板垣評は、民選議院設立建白書に先だつ一八七二年（明治四）一〇月のものである。
- (48) 「河瀬眞孝宛書翰」『木戸孝允文書』四、三三九頁
- (49) 「松本鼎宛書翰」同右、五、二〇二頁参照。木戸はつづけて「福沢（諭吉）等も折々来訪候處、此度之建言に而歎息大笑。必竟、列政府候様之人品に而如此事を世上海外之人に被知は可耻之至と申居候。」と書き記しており、民権派にたいする輕侮の氣持をかくしていない。
- (50) 「内海忠勝宛書翰」同右、六、三〇二頁
- (51) 「木戸孝允日記」三、二五二頁、一八七五年（明治八）一〇月二三日の項
- (52) 「青木周藏宛書翰」『木戸孝允文書』同右、六、二三四頁
- (53) 「尾崎三良宛書翰」同右、七、七四頁
- (54) 「内政充実・地祖輕減に関する建言書」同右、八、一八五頁
- (55) 「大山巖への書翰」『大久保利通文書』四、四六八頁

- (56) 「国本培養に関する建議書」、同右、七、八〇頁
- (57) 「行政改革建言書」、同右、四四六頁
- (58) 「伊藤博文宛書翰」『木戸孝允文書』五、一二三頁
- (59) 「榎村正直宛書翰」、同右、六、三八六頁
- (60) 「伊藤博文宛書翰」、同右、五、三三六頁
- (61) 木戸はこのような弊害の発生について、直接大久保に問いただしたことがあった。しかし大久保の答は、「今日之時勢に而は、取込、丈、け、取込、其弊害は十年か十五年歟之後には必其人出候而、改正可致」というもので、木戸にとってみれば「ばつとしたる大人らしき論に候へとも」、その見通しには何の保証もなく、納得のいくものではなかった。(「井上馨宛書翰」、同右、五、四頁)
- (62) 「町村会の速行并に国会開設に関する意見書」、同右、八、一七〇頁
- (63) 『木戸孝允日記』三、四八〇頁。一八七七年(明治一〇)一月九日の項
- (64) 「岩倉具視宛書翰」『木戸孝允文書』七、三八七頁
- (65) 「矢戸・山田宛書翰」、同右、七、三〇一頁
- (66) 「品川弥二郎宛書翰」、同右、七、一七二―三頁
- (67) 「岩倉具視宛書翰」『松菊木戸公伝』下、二〇九六―七頁
- (68) 「国会開設に関する意見書」、同右、八、一六九―七〇頁
- (69) 「矢戸磯宛書翰」、同右、七、三三三頁
- (70) 「岩倉具視宛書翰」、同右、七、三八七頁参照
- (71) 「岩倉具視宛書翰」、同右、七、二八九―九〇頁。なお「町村会の速行并に国会開設に関する意見書」、同右、八、一六六頁参照。
- (72) 「井上馨宛書翰」、同右、七、二〇二頁

むすびにかえて

最後に、木戸が構想した政治体制について見るとき、そこには以上のべてきた彼の思想の特色が如実に反映しているということが出来る。前述のように、木戸が制度化の必要を強く感じたのは、維新政府の支配から恣意性を除去す

るためであった。つまり、「政規は一国の是とする所に因りて之を確定し、百官有司の隨意に臆断するを禁し、萬機の事務総て其規に則りて處置する事を期するに在り」というのが、制度についての木戸の基本的な考えであった。木戸は五ヶ条誓文にも、このような意図が内包されていると考えた。それゆえ、「人生の要務」が「開化の進むに従て相増し、政府今日の事務は亦已に戊辰年間の事務と其轍を等しうして論す可ら」⁽²⁾ ざるならば、なお右の目的を達するために、五ヶ条誓文を拡大して憲法（根本律法）⁽³⁾ を制定することが必要であると木戸が考えたことも理解できよう。

だがそれと同時に、木戸の構想において憲法のもつもう一面の意図は、国民の主體的活動に予測可能性を与えることにあった。「聖主今日の教旨を推すに、豈天下を以て一家の私有とせんや。民と斯に居り、民と之を守り、國務萬機統て人民に關涉せざるはなし。況や、人民各權利あり負債あり。權利を張て、天賦の自由を保ち、負責を任して、一の公事に供する等、亦人民存生の目的なり。細かに其條目を記載し、盟約して、其制に違反する事を禁し、相互に従順するものは即典則なり。」⁽³⁾ ここでのべられているように、木戸は人民の主體的社會活動を大胆なまでに容認しようとしているがゆえに、制度化をとおして国民の活動に予測性と計画性を保障しようとしたといえよう。

ところで、大久保と同様、木戸の体制構想においてもその要^{かなめ}の位置を占めるのは天皇であった。それは尊攘派時代の木戸の「正氣」論の中で天皇の位置と重ね合わせることができる。西欧の立憲君主国と対照しつつ、木戸は次のように日本の近代君主制論を展開している。西欧の「文明の国に在ては」、「君主ありと雖とも闔国の人民一致協合、其意を致して」立法、行政、司法が執行される。「有司」は国民の意志に徹底して服従しており、「非常緩急の際に在りと雖とも、一致せる民意の許すところに在ざれば漫りに挙動を試むる事能わ」⁽⁴⁾ ざるごとく、きわめて「民意」が尊重されている。つまり木戸においては、西欧諸国の政治体制に非常にデモクラティックなイメージが与えられている

といえよう。

しかるにわが国の場合は、「一國尚不化に属し、文明未だ洽ねからざ」ることを理由に、「暫く君主の英断を以て一致協合せる民意を迎え、代りて國務を条列し、其裁判を課して有司に附託し、以て人民を文明の域に導かざるを得ず⁽⁴⁾」というように君主の指導的役割に大きな比重がかけられている。さらに「聖令固より重大にして、且其事務の重き、欧米諸國に於て民意を體して政を行ふ者に毫も異な⁽⁴⁾」らずとして、「議士」による「驗査」も不要とされる。つまり啓蒙君主としての天皇の「独裁」に絶対的な権限と信頼が賦与されているといえよう。晩年の木戸が、成年に達した明治天皇の政治教育につとめ⁽⁵⁾、また皇室財産の確立に尽力するなど皇室の基盤を固めることに努力しているのは、この構想の実現に着手しているといえよう。

それでは、木戸がこの構想の条件として付した暫定性はどのような意味をもっていたであろうか。木戸は次のように将来における国民の政治参加の意志を予測し、それを許容すべきであるとしている。「他日、人民の智識愈々進歩するに従ひ、人々自主自由の権を得ん事を欲し、各國制度の體裁に倣ひて下院を開き、國民名代となりて政府の議に参せんと企るに至るへし。此時に當らは、政府と雖とも之を抑制するの理なし⁽⁶⁾」しかしこの権限の委譲もあくまで「漸進」的になされるべきであると木戸が考えていたことはいうまでもない。そこで木戸は、地方自治こそ國民の「氣象」を伸張させるものであると考え、教育による近代化と自治による政治的能力の涵養を重視し、ここから國民の着実な國政参加を展望している。⁽⁷⁾「道路・堤防・橋梁等、およそ各縣の以てその民に課すべき所のものは、町に在ては町に議し、村に在れば村に議し、衆心共同して、しかしてこれを出さしむ。これ、今日もつとも民に益ある者にして、他年その整備に従ひ、漸く進めて以て区會、縣會に及び、終に國會に至らしむ⁽⁸⁾」天皇の「独裁一権は、教養と自治能力を獲得し、議會制度の通路を通じて上昇してくる國民に漸次委譲されていくというのが、木戸の展望であ

った。だが一八七七年（明治一〇）の木戸の死は、以上の構想を彼自身の手によって実現する機会を永遠に奪ったのであり、この構想の具体化は大久保および伊藤博文らの手に委ねられざるをえなかったのである。

(1) 「憲法制定の建言書」、『木戸孝允文書』八、一二二頁

(2) 同右、八、一二三頁

(3) 同右、八、一二三―四頁

(4) 「憲法制度の建言書」、同右、八、一二一―二頁

(5) たとえば「聖上、各国之形情、政体等も本譯書に而も御覽被為遊、世之變遷を具に萬古御洞察、億兆を統御被為遊候御工夫被為在、且洋文等も御自在に御読破被為遊候儀、御盡力奉萬禱候。」（「河瀬眞孝宛書翰」、同右、四、三三八頁。）大久保もまた、天皇の政治的能力を育成することが必要であると考えており、彼らはともにその晩年には天皇の政治教育に非常な熱意をもっていた。

(6) 「立法・行政に関する建言書」、同右、八、六一頁

(7) 木戸は、地方自治を積み上げていく、次のような国家の発展、「富国強兵」化を理想とした。「人民一般の処に付て、平生租税を減し、致富勸業、各々自主自由の道理を知らしめ、一人より一村、一村より一郡、一郡より一国、一国より全国の富強に至るの基本を起さんと久敷誠心を盡すところ」（『木戸孝允日記』三、一一三頁）

右の木戸の考えは、当時の中央偏重の近代化（「日本橋近辺の開化」）にたいする批判にもとづいている。

(8) 「国会開設に関する意見書」、『木戸孝允文書』八、一七五頁